

イタリア語およびロマンス語における 動詞＋名詞型の合成名詞

I nomi composti del tipo verbo+nome in italiano e nelle lingue romanze

菅田 茂昭

Shigeaki SUGETA

1. ロマンス語の語形成においては、ゲルマン語とは逆に合成よりも派生が伝統的に優勢であることは一般に知られている。しかも派生の語形成のなかに占める割合がいかに大きいかは、ロマンス語の歴史文法のなかで派生と合成に与えられた頁数の比が、例えば Meyer-Lübkeにおいては 191対14、Rohlf'sのイタリア語の歴史文法では 128対8、Teškavčićにおいても 174対23であることから十分に理解される。筆者はこの点 Tekavcic に関して、近年頻繁に用いられるようになった *parola chiave* (キーワード)、*treno merci* (貨物列車) のような名詞＋名詞型の合成名詞 (この場合厳密に言えば名詞句の特性も維持しているが) の具体例を収集し、その分析結果を発表した際、ロマンス語の語形成における派生と合成のこれまでの伝統的な均衡は20世紀に入って崩れ始めており、しかも合成に関してはロマンス語のなかでイタリア語がもっとも進歩的であるという主旨のことを述べた (XX Congresso internazionale della SLI, Bologna, 1986)。同様な視点から今回は *apriscatole* (罐切り)、*lavapiatti* (皿洗い機) のような動詞＋名詞型の合成名詞を検討してみたい。

2. まずこの型の合成も他の型の語形成の場合と同じく、そのメカニズムは次のように動詞＋名詞 (目的語) からなる動詞句あるいは文の語彙化として捉えることができる (ここでは動詞＋名詞 (主語) からなるわずかな例を除く)。なおその際名詞に付随する冠詞は原則として削除される。

lavapiatti ← X *che lava piatti*

だがこのような語彙化には一般的にいくつかのモデルが存在し、合成はそのうちのひとつであることを、Pottierのフランス語の図式 (筆者により簡略化されている) がよく示している。

(i) 句として留まる (語彙化に至らず)

machine a laver 洗濯機 [動作の対象 (*linge* 洗濯物) を省略]

(ii) 合成

lave - vaisselle 食器洗い機

(iii) 派生 [- (at) eur]

aspirateur 掃除機 [動作の対象 (*poussière* ほこり) を省略]

(iv) ラティニズムに由来する合成

ostreiculteur カキ養殖者

なおときには、フランス語という同一言語のなかで *lèche-bottes* と *lécheur* (いずれも「おべっかつかい」) のように合成と派生とが競合する場合があります、イタリア語においても *leccapiedi* と *leccone* のように同一現象がみられる。一方「掃除機」の場合は、フランス語では (iii) 派生型であるのに対し、イタリア語は (ii) 合成型に従って *aspirapolvere* を用いるように言語に跨がるズレが生じている。

3. 歴史的には、動詞+名詞型の合成は、ラテン語に遡るものではなく、ロマンス語における改新といえる。というのはラテン語にわずかながらみられるこの種の合成は、ロマンス語とは順序が逆の名詞+動詞からなるものであった。AGRICOLA農夫 (<ager畠地+colo耕す)、SIGNIFER軍旗手 (<signum軍旗+fero運ぶ) のような例があり、動詞は語幹で終わっていた。さらにこれをSCUTIGERULUS盾持ち (<scutum盾+gero持っている+ul) のように指小辞で拡大したものも用いられた。後者はこんにちのイタリア語にもみられるfruttivendolo (果物屋)、lattivendolo (牛乳屋)、pescivendolo (魚屋) などの原型である。ところが前者の型は、HIRUDO (ヒル) に代って形成されたSANGUISUGA (<sanguis血+sugo吸う) が、イタリア語にそのままの形で、フランス語ではもはや単一語といえるが sangsue として受継がれているようなわずかの例を除けば、ロマンス語に合成のモデルとして継承されていない。この型の合成には異教徒あるいはローマ法に関連するものが多かったほか、おそらく1語として曲用したため新しい合成のモデルとしての働きを無くしたと考えられる (cfr. Tekavčić, p. 205)。

ではこんにち生産的であり、しかもロマンス語の統辞法をそのまま反映する動詞+名詞型の合成が本来のラテン語に遡らないとすれば、一体いつ頃から用いられたものであろうか。A.Pratiによれば、最古の例は4世紀のLABAMANOS (手洗い)、つづいて723年にTOSABARBA (床屋)、743年にはVinceluna (新月) などの例に出会うと述べている。彼はこの型の合成を各地から採集し、そのほとんどが最初はあだ名として登場したことを指摘している。しかもそのなかにはBeviacqua (定冠詞付きの形Bevilacquaもある) のようにこんにち姓として用いられるにいたったものも少なからず含まれている (日本語の姓「石渡」などと比較しうる)。やがてあだ名が一般化されると、lustrascalpe (靴磨き)、falegname (大工)、spazzacamino (煙突掃除夫) のように、そのような行為をする人を表わす普通名詞 (+ human) へと発展する。しばしばmangiapreti (聖職者嫌い)、mettiscandali (陰口をいう人) のように軽蔑的なニュアンスを生じている。このあだ名を起源とする用法が、一種の擬人化により beccafico (ニワムシクイ)、beccapesci (アジサシ)、mangiaformiche (アリクイ) のように他の生物名詞 (-human)、さらに無生物名詞へと拡大され、最初に挙げたこんにちのlavapiatti (皿洗い機) あるいは lanciamissili (ミサイル発射装置) のような例を生産する型へと発展したと考えられる。この型の合成の豊富なリストは、やや古典的となったがTollemache (1945) に用意されている。そこには合計942例 (うち795例は-a語幹動詞、残りの147例が-e, -i 語幹動詞からなるもの) が採集されているが、文学への片寄りが著しい。本来すべての他動詞とともにこの合成は可能である筈だが、現実には若干の動詞に集中している。Dardano (1978) は、イタリア語でaccatta- など75語を挙げ、そのうちこんにちももっとも頻繁に用いられるものとして、apri-, copri-, gira-, guarda-, la va-, para-, porta-, taglia- をとり出している。

4. ここでこの合成の構造をめぐる特性を列挙しておく。

a) この合成の構造は次のように示すことができる。



新しい名詞は右図のように動詞句 (動詞+名詞) の名詞化により形成されるが、左図はそれを単純化し

たものである。名詞句（名詞＋名詞）の名詞化（N→NN）が内心構造をなす合成であるのに対し、動詞句の名詞化（N→VN）は外心構造からなる合成である。新しい名詞の性・数が、前者では中心語（名詞）の性・数をそのまま受継ぐのに対し、動詞が中心語となる後者では男性・単数の扱いをうけるのが一般的である。これらの2種類の合成はいずれも統辞論的配列をそのまま受継いでいるため、ロマンス語では中心成分が原則としてつねに左手に位置するが、英語ではたとえば *freight train* と *pick pocket* のように左右に分かれることになる。

なお正書法上、二つの合成要素は、フランス語、ポルトガル語、ルーマニア語はその間にハイフンを置くが、融合する傾向にあることにも注目しておきたい。これは、N→NN型の合成では二つの合成要素が1語として融合する若干の例を除けば、ハイフンのある・なしにかかわらず切離して綴られるのとは対照的である。

アクセントに関しては、N→NN型の場合両要素が強アクセントを保つのに反し、語彙化の進行した N→VN型においては、第2要素（名詞）に強アクセント、第1要素（動詞）には中間アクセントが一般的であるようである。

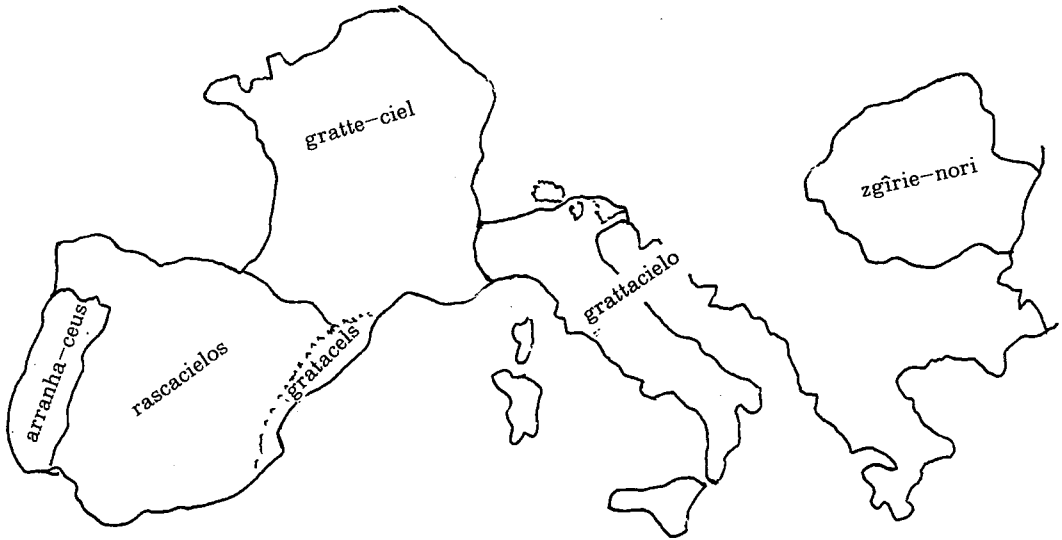
- b) 第1要素、すなわち動詞の形態論的解釈については、現在のところ決定的な結論に達していない。おおまかに三つの考えが対立している。伝統的にはこれを命令形と見做す説が Meyer-Lübkeをはじめ Bourciez, Prati, Rohlf, Miglioriniなどにみられる。第2にこれを動詞の語幹とする立場が Pagliaro にみられ、Hallにも支持されている。かつて *Lingua Nostra* (1948) 誌上で、*facidanno* (厄介者) を語幹の証拠例として挙げる Hall を、Migliorini が *falegname* (大工) の存在も無視できないと論評している。第3に直説法・現在・3人称単数形を主張しているのは Tollemache である。ただし *-e, -i* 語幹動詞では *apriscatole* (糶切り) のようにこの形を *e>i* とする難点を伴う。
- c) 第2要素の名詞の形態に関しては、意味論的な考慮も要求される点であるが、単数・複数のいずれも起こりうる。

<i>passa port</i> パスポート	<i>aspira polvere</i> 掃除機
m. sing.	f. sing.
<i>asciuga capelli</i> ヘア 드라이ヤー	<i>porta sigarette</i> シガレットケース
m. pl.	f. pl.

一般的には複数の傾向が強い。複数形に置かれることは、それ以上の拡大（派生）を阻む役割を担うほか、合成語自体を不変化名詞とするが、単数形の場合は、その複数形を生じるもの（*beccafico* アジサイ - *beccafichi* など）と不変化名詞化するもの（*passamontagna* 防寒帽 s. m. invar. など）とに分かれる。

- d) N→VN型の合成は、中心語をなす第1要素としてくり返し起こる動詞のリストを作成（閉ざされた集合）できるのに比べて、N→NN型の合成ではこれが可能なのは第2要素の名詞だが、*punto chiave argomento chiave* のように限られた種類の型においてであり、全体としてはリストは無限の拡がり（開かれた集合）となる。
- e) N→NNなる合成が全体としては学者語あるいは官公庁的文体に属するのに対し、N→VNの方はその起原から理解されるようにむしろ庶民的用法といえる。

5. この合成のロマンス諸言語における分布を示してみる。



イタリア語 *grattacielo* (摩天楼) ほかのこれらの例は、英語 *skyscraper* からのなぞりをもとにこれら諸言語間の相互影響も無視できないが、また *cer* (空) の代わりに *nor* (雲) を用いるルーマニア語におけるズレはあるとしても、この型の合成が主要ロマンス諸言語に普及していることを示すものである。同様な結果は、ポ *porta-aviões* (空母) : ス *portaaviones* : カ *portaavions* : フ *porte-avions* : イ *portaerei* : ル *portavion* [なおルーマニア語はフランス語からの借用とみられる。しかしながらこのような一致はむしろまれで、多くの場合次のように合成と、派生など合成以外の手段によるもの〔イタリック体にて示す〕とに分かれる。

lava-platos : *lavaplatos* : *rentaplats* : *lave-vaisselle* : *lavapiatti* : *spălător de vase* (皿洗い機)

porta-vos : *portavoz* : *portaveu* : *porte-parole* : *portavoce* : *purător de cuvânt* (スポークスマン)

aspirador : *aspirador* : *aspirador* : *aspirateur* : *aspirapolvere* : *aspirator* (掃除機)

amuleto : *amuleto* : *amulet* : *porte-bonheur* : *portafortuna* : *amuletă* (お守り)

筆者の調査によれば、N→NNの場合と同様に、この合成もすべてのロマンス諸言語のなかでイタリア語がもっとも普及させている。興味あることは、たとえばルーマニア語のようにロマンス語圏の周辺にラテン語の伝統を継承する派生が根強いことである。

6. さいごに、この合成に関して次の2点を指摘したい。

第1はその歴史的な解釈、ロマンス語の語形成における派生と合成の伝統的な不均衡が、派生の普及率がほぼ限界に近づくにつれて、合成の空白を埋め合わせることにより是正され始めたという推論である。これは同時にロマンス語とゲルマン語の語形成レベルにおける伝統的な分岐から収束へのひとつの動きとも捉えられそうである。さらに総合から分析へというロマンス語の成立過程の背景のなかで、最近の合成の著しい普及は、語彙レベルにおける、時代を隔てた、一種の分析化現象なのであろうか。

第2はその統辞論的解釈である。これまでソシュールによる共時態と通時態の峻別が、まさにその交差点を仕事場とする語形成の研究に戸惑いを感じさせてきたことも否定できない。しかしこの種の合成は、形態論の枠を越えて、句または文の語彙化への動きの典型的な例を提供してくれる。最新の語彙文法の発展とともに今後継続して研究されるべき課題である。Benvenisteのことは《il faut, à notre avis, envisager les composés non plus comme des especes morphologiques, mais comme des organisation syntaxiques. La composition nominal est une micro-syntaxe》(1967)を想起しながらこの報告をおわりたい。

参 考 文 献

- Adams, V (1973). *An Introduction to modern English Word-formation*. London.
- 有泉泰男(1975)“ゲルマン語における語形成について”〔エネルギー刊行会編：言語における思想性と技術性〕東京。
- Bally, Ch. (1932) : *Linguistique générale et linguistique française*. Bern. [小林英夫訳：一般言語学とフランス言語学。東京、1970]
- Bauer, L. (1983). *English Word-formation*. Cambridge.
- Benedek, N. (1978). “Sostantivi composti nell’italiano contemporaneo” [LN, Vol. XXXIX, F asc. 4.]
- Benveniste, E. (1967). “Fondements syntaxique de la composition nominal” [BSL, LXII]
- Bourciez, É (1956⁴). *Éléments de linguistique romane*. Paris.
- Dardano, M. (1978). *La formazione delle parole nell’italiano di oggi*. Roma.
- De Mauro, T. (1963). *Storia linguistica dell’Italia unita*. Bari.
- Dietrich-Martin-Geckeler(Hrsg)(1987). *Grammatik und Wortbildung romanischen Sprachen*. Tübingen.
- Di Sciullo, A. M. and Williams, E. (1987). *On the definition of Word*. Massachusetts.
- Ferrater. G. (1981). *Sobre el llenguatge*. Barcelona.
- Giurescu, A. (1975). *Les mots composés dans les langues romanes*. The Hague.
- Hall Jr., R. A. (1971). *La struttura dell’italiano*. Roma.
- Hudson, R. (1984). *Word Grammar*. Oxford.
- Lloyd, P. M. (1964). “An Analytical Survey of Studies in Romance Word Formation” [Romance Philology, Vol. XV11, No.4]
- Manteca Alonso-Cortes, A.(1987)“Sintaxis del compuesto”[Lingüística española actual, IX / 2.]

- Meyer-Lübke, W. (1890-1906) . *Grammaire des langues romanes*. Paris.
- Migliorini, B. (1960) . *Storia della lingua italiana*. Firenze.
- Müller, B. (1975) . *Das Französische der Gegenwart-Varietäten. Strukturen. Tendenzen*. Heidelberg.
- Pottier, B. (1974) . *Linguistique générale-théorie et description*. Paris. [三宅徳嘉・南館英孝訳 : 一般言語学-理論と記述. 東京、1984]
- Prati, A. (1931) . “Composti imperativi quali casati e soprannomi.” [RLR,7]
- Rohlf, G. (1969) . *Grammatica storica della lingua italiana e dei suoi dialetti*. III. Torino.
- Selkirk, E.O. (1982) . *The Syntax of Words*. Massachusetts.
- Tekavčić, P. (1972) . *Grammatica storica dell'italiano*. III, Bologna.
- Tollemache S.J., F. (1945) . *Le parole composte nella lingua italiana*. Roma.